

Moje West Chronicle

～京都ミュージックシーンの系譜～

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

phase 36 Music Café OOH-LA-LA②



プロでなくても伝説はできる。
最低限の挨拶さえあればいい。

同店のオーナー小原氏が言う「見せ物小屋」に必要なものは何なのだろうか。「宜しくお願いしま〜す」と「ありがと〜ございました」さえ言えればええんちゃう？自分らが人に見せて恥ずかしくないって思えるレベルでできてたら、人にどうのこうの言われる必要もないと思うし、自分たちで納得がいかなければライブハウスとかお客さんやタイパン相手に意見を聞くのも手やし。(腕擦れの 水島さん)しる。(拾得の) テリーさんにしる。訊いたって「なんでオレに訊くねん？」って言われて終わりやん(笑)。「ドラムがちょっとなあ」とこっちが思っても、「練習やれるだけやってんねんから、ガタガタ言うなや」ってなるやろし(笑)。ただなあ、最近の若いコはノルマ制のとこばかりでやってるからかもしれんけど、「ノルマないの何で客を呼ばなアカンねん？」って逆キレや。(観客が)

3人とか5人とか、あまりにもヒドイねんか。そういう形があった方が出やすいみたいやね。せやから今年の4月からとりあえず、最初だけ様子を見るのにノルマ制にした。
ステージに出るのに、「いくらですか？」ではなく、「何人集めたらいいですか？」であるう。以前に他のライブハウスで何った話をぶつけると、「うんうん」と大きく頷いたうえで、「それ以前に、何しに来てんの？ちゅう話」。

スタジオで練習をした。ステージに出た。その差は何か。人前かどうかである。「人に観てもらいたいしやろ？タイパン3つ集まって、どっことも客を呼ばへんかったら誰もいいひんやん。自分はミュージシャンです」って言える言えへんの項目はどやうっていう話で、それは「いつでも人に観てもらえる場を確保できる」ことちゃう？今、日本の頂点はスマップですわ。音楽的なパフォーマンスを言うたら、彼らより優れたヤツは聞けるほどおる。「何が違うねん？」っていうたら「動員力、面白い面白くないかは、人それぞれの価値観として、スマップがどれほどスコイかっていうのは、それだけの動員力を持つって言うことやん。自分が動いたときに、身内であるうが他人であるうが「人に観てもらえる力」を持つていかどうか。それがなければ子供の前で『ババ音キターやってたんや』と言うて何と何も変わらん。何かのオーディションに受かった。メジャーデビューもした。でも2年で契約が切れた。そんなヤツはゴマンといる。確かに上手い。メジャーデビューもしたかもしらん。でも客は来いひんでは、僕はミュージシャンともプロとも思わへん。逆にプロとかメジャーとか全然関係ないところで売れてるヤツっていうのは、伝説っていうのを生んでんねん。「オマエがやるならいつでも観に行くわ」ちゅうヤツがまわり何百おつてみ？ちゅう話、まず業者が放つておかへん。いつでもプロになれる。音楽なんかできんでも、1時間うろつくと人を笑わせられるヤツがおつたら、そいつは自然に有名になつていく。

毎日やってナンボ、と思ってる。
ほぼ実践しているのは凄いとと思うのだが…。

本コーナーではライブハウスとは「音楽の底辺を支える存在である」という言い方をしてきた。取材の都度、実感するからだ。マジソンスクエアガーデンや、東京ドームや大阪城ホール、京都会場に、野外フェス会場はピラミッドの頂点であり、その下の数多のライブハウスを支えられている。ヨーロッパや南米のクラブチームの下部組織や、子供たちが裸足でサッカーボールを蹴っている空き地や街角と同じだ。

「僕らの考えとしては、いつも無料やったら面白くなかつたら帰れよ」と言えるけど、例えば500円でもお金をとつてる以上は、ほんまはとりたくないけど、1000円とつたら1

000円以上のものを演つてくれんかねえ？それは心構えということ以前に、マナー的なことだ。イコールで結ばれるべきものかもしれない。『ビジネス云々じゃなくて、『これやったら家で飲んでる方がマシやったなあ』と思われようなヤツは出したくないよなあ』という指針でもって、ほぼライブは毎日があるのは立派なものである。

ライブがなければ店は開けない。「開けたら入らへんもん(笑)。そらオープン当初はフッキングもイチからやし、(出てくれる)知り合いもそんなにないし、いてもそんなにしょつちゅうはムリやし、100も200もバンドを知つてるわけでもないし、今でこそほぼ毎日できてるけど、それでも月に3日とか4日とかは空いてくる。やつぱりライブハウスは毎日稼働してな意味がないんちゃうかなと思うけどな。3、4日の休業日では、まだまだ、そんな風に考えている。

目立ちたがり、いるんちゃうの？
京都人とか、そういうの関係なく。

同う話の全てにおいて、京都も大阪も札幌も沖縄も関係ないという感想を受ける。土地柄を論じても詮がない。誰だって同じだ、という風である。「あまり人前に立ちたがらない」という氣質が京都にもあったらとら？とぶつけてみても、「目立ちたがりなんて、どこにでもいるもんちゃうん？」(笑)。同コーナーで何度も引き合いに出してきた、九州のライブハウス事情を例にとつて、重ねて訊いてみた。「そやなあ、九州は熱いなあ。京都はそやなあ、人に声をかけたりすることが、悪いことのように思つていうのは、あるかもしれんね。根暗な感じ、趣味が同じヤツとしかツルまない？なるほどねえ。逆の言い方というか、ライブハウスをやっている立場としては、それって一番のマイナス要因やね。新しいモンが入って来いひんもんな、最悪やな。そんな環境でなんぼライブをやつてもなあ。認めてくれる人がいたって、本人にその気がなかったらなあ。はじめの一步は自分の努力やん？一人の客が「面白かつたし、次は誰かを連れていこう」となつていくわけやから。集められる人がいて、サポートをしてくれる人ができればまずと規模は大きくなる。事務所やマネージメントというサポート役がまた、人を集めてくれる。だが逆に、どれだけ大きなサポートがあつたとしても、人を集める気も集める力もない人間はミュージシャンではないプロではないし、いられない。それはほんとに出の中学生上がりも、30年選手のベテランも変わらない。「京都の出身やったら「くるり」か。ウチはあんまりメジャーなバンドは来てないけど、「アジカン」は来たことがある。彼らだつて一精やん、僕はそう思うけどねえ、信じていることがあるから、一般論は気にならないし、特に不都合は感じていない。そんな氣質が伝わってくる。きつと、一途なんだろう。

政治で わたしは 変われない。



次のヤツはなんぼでも出てくるよ。ただ、続けて欲しいとは思わねえ。

良いミュージシャンやプロはどの街から出てきてくれたら構わない。「出てくると思うよ、いくらでも。ただ続けられるかどうかやね。何回ライブをやっても、結局客が『集まらへん』っていうバンドは勝手に解散していくよ。売れてる売れてへんかなんて関係ないんよ。ライブが終わってCD売ったり、目があった人には『ああどうも』って一言かけた。遠藤ミチロウだってやってるねんで。人間やもん。気いよおしてもらたら、『ああ次も観に来たらか』って思うやん。それは音楽じゃなくても、服の販売でも一緒やん。人としてのつながりの基本やん。愛想の悪い服屋で服買おうとは思わへんし、愛想の悪いバーで酒飲もうとも思わへんし。そんなことができるのはスマップくらいになつてからやつちゅうねん。(笑)。スマップだってきつとみんな愛想ええぞ？(笑)。

「自分が面白いことをやってると思っても、道はたて『来て下さい』で声かけても難しいわな。そしたらいつ客を集めるねん？て言うたらライブが終わった直後や。出演者は解つてなくても、観てる方は『あ、ヴォーカルの人や』って解るし、目え見たら『ちよつと自分に興味あるな』つても解るやん？(笑)。ライブが終わった瞬間、出てたヤツはスーパースターや。けど次の日になつたら誰も覚えてへんって、僕に言わしたらライブ終わりなんて『引っかけまくれ』っていう話や(笑)。自分らのバンドの動員が悪かつたらタイマンの客なんて一番の客やん(笑)。だからライブ直後の愛想のひつが大事やねん。ライブが終わって『ありがと』もない、知らん顔して帰るヤツに何ができるつちゅう話よ。もし(氣質のせいで)それをせえへんのが京都やつたら最悪やな。九州では学校の先生もハコも生徒も、開放的になつて土壌ができてるんやろしね。育つた拾得や確信のような、ちよつとした緊張感があるハコ

であつても、『ありがと』の気持ちには絶対持っていると、野ケイジで知ってる？やつてる音楽は気持ち悪いし、ステージでは何をやってるかわからんようなイメージの人でも、ムチャクチャ愛想ええねんかあ(笑)。愛にええ人やねん(笑)。「明日誰かヒマな人いなかなあ？誰か僕と遊んでくれる人いなかなあ？」って、そんなんやぞ？(笑)。

こじは、出会いを求めてくる人間。対象が音か女の子か出演者かの違いだけ。

「例えばローリングストーンズが『GO GO GO』というハコに出てた。『GO GO GO』ってのは女の子をハントするこやねん。そうやって楽しみに来るところや。その通りであつて、出会いを求めて来てるねん。それが原点。その『出会い』つてのが音であつたり笑いであつたり、女の子であつたり出演者だつたりする。日々の仕事なんて面白くないやん？だからそういう出会いの場所にか新しくて、自分が面白いと思える刺激が欲しいと思う。そのために飲み食いできる場所、そうありたいと思う。ライブが終わつてすぐ吐き出すつてのは、僕から言わせりゃ常識はずれやな。ゆつくりできるからこそ、ライブが終わつて『ああどうも』の一言とか、『ライブ、良かったし一杯どう？』つていう会話が成り立つ環境がライブハウスなんやうかなあ」。

ミュージックシーン、というのが同コーナーのテーマだ。その原点もそこにある、と、恐らく、理詰めや長い言葉でもって、説明をするのは、決してお得意ではないだろう。それを一所懸命に付き合つて下さつたことをありがたく思う。

30余年前の、70年代の京都で、小原増男氏という個人としてインタビューをしたならば、拾得や確信の楽しみ方を知っている人、と紹介しただろう。今までに、同コーナーでその楽しみ方を過去のものとして扱つたことを、少し反省する。観る側としてだけでなく、その場を提供する立場で、それを体現している人がここにいる。

「ウチは全国からのバンドがすく多い。ジャンルにこだわつたり、形にこだわつたりすること自体が、オレは好きじゃないし、形にこだわることによって狭くしていると思うし、何やかんやジャンルで分けたがるのはCD探すときにある程度ジャンル分けされてないと『見つけにくいやん』つていうのと同じなんかなあ？」「京都系」と呼ばれるものも、ひとつのジャンルである。だから、気にしない、というか『京都系』というものが何か知らない。興味がない。では京都でなくても良かったのでは？と思わなくもない。「京都がイクスやとして」地方に行つたらええ人多いように思うけど、騙されたこともナンボでもあるしな(笑)。それはそいつの性格やと思うねん。それに、足下も固まらへんのに、つていうのはある。大阪とか



東京とか言うても、京都知らんのにンなとこでできるかい？つてなるしな。

逆に小原氏からの質問が多くなり、徐々にほくれて笑顔が増えていく。けれど言葉には熱が溜まっていく。「訊かれたから答えただけで、毎回誰にも言うてるわけちゃうぞ(笑)」。こもつともだ。でも、こやうつて、少しずつ馴染んでいくのが、きつとこの店のやり方なんだろう。男と生まれたからには、野望があつて然るべし。「誰にでもあるんやうん？」という小原氏の野望は、予定よりも早く形になつた。50歳に近くなつた今、60歳になつたときの野望がある。

読者の方々の中で、仕事に追われて弾かなくなつたギターを持つている方がいて、それでも弾けば「いつでも人が呼べる」という自信がある方は、この店のドアを開けてみて欲しい。最低の敬意さえあれば、喋り方がどうであつてもいい。ライブハウスつて良いもんだと、改めて思えるんじゃないだろうか。



Music Café OOH-LA-LA
京都市西大路筋茶師東入北側 アシタビル1F
075・311・3400
18:30~翌1:00/無休
http://oohlala.fc2web.com/

Cafe TUMBLING DICE
京都市右京区西大路通六角北東角
075・315・6219
12:00~翌4:00/無休

06.9.6 秋篠宮紀子さまが午前8時27分、第3子の男子を出産。41年ぶりの皇室での男子誕生となり、悠仁(ひさひと)さまと命名される。皇位継承順位は第3位となり、女性、女系天皇を認める皇室典範改正が見送られる。
06.9.6 ポプ・デュランの最新アルバム「モダン・タイムズ」が米国アルバム・チャートの首位獲得。76年の「ディザイアー」以来30年ぶりの快挙となり、自身の通算では4度目。